様式3

令和6年5月23日

理事長　殿

2023年度　特定課題研究費研究報告書

研究代表者	所属	一般科	職	教授	氏名	本多典子
研究分担者	所属	一般科	職	助教	氏名	河野光将
	所属		職		氏名	
	所属		職		氏名	
研究課題名	（和文）早期専門教育に資する適切な文章表現テキストの作成					
	（英文）Creation of Japanese writing texts that contribute to early professional education					
研究種目	教育課題研究					

研究実績の概要

まず将来的な教材開発を見据え、現在入手可能な文章表現に関わる教材の網羅的収集を行った。文章表現に関する教材は非常に多くあるが、それらの知見をうまく活用することで、中等教育から高等教育にまたがる高専の特徴を踏まえた教材開発をより迅速に進めることが可能であると考えたためである。

次に、検討の結果を踏まえ、大修館書店『基礎からはじめる国語の表現力トレーニングノート』を実験的に導入した。導入にあたっては、特に、基礎的な項目のわかりやすさとドリル形式の充実度の双方を加味し、採用の基準とした。続いて、導入した教材に基づき、文章を書く上での基礎的な項目について学習を行った後、学生の文章表現力を確認するためのテストを行った。結果で着目されたのは、まず「主観的判断」についてである。小論文をはじめとする客観的文章において主観的判断を持ち込むことは避けるべきことである。しかし、正答率が著しく低下しているのは、中学校までの作文教育の影響によるものと予想される。次に、「漢字の誤り」について、同訓意義語の使い分けに関しても正答率が低かった。近年は、PC、スマホ等で予測変換や変換候補を自動的に示してくれることが多いが、使い分けについての正確な知識がない場合、誤りを見過ごしてしまうということが予想される結果となった。また、「い抜き言葉」については、日常生活においてごく自然な表現であるため、誤りに気付きにくいと考えられる。

今回の調査を受け、高専における文章表現能力の向上にあたっては、まず中学校までの作文教育との違いを学生に理解させることが重要であることが明らかとなった。特に主観・客観の区別については十分に指導する必要があろう。また、これに関連して、事実と意見の峻別についても丁寧な指導が必要になると考えられる。さらに、学生が誤りやすい項目については、大まかな傾向は窺えるものの、同一項目内部においても正答率に差が生じている。この点に関しては、学習者のエラー分析が有効であると考えられる。誤りをデータとして蓄積していくことで、表現力向上のために必要な指導の優先度を明確化していくことができると考えられる。本研究で得られた成果を活用し、学生の実情に照らしより相応しいテキスト開発につなげていくことが今後の目標である。

研究発表（論文、著書、講演等）

その他（教育活動・OPCへの貢献、特許等）

OPC講座「ここで差がつく！小論文講座」